



連載

常陸時代の佐竹氏 — 500年の軌跡を追う —

「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第14回】

南郷・赤館城の攻略

棚倉の町を一望できる赤館城跡

福島県東白川郡棚倉町は、八溝山麓北側に広がる城下町である。八溝山を源流とする久慈川が町の南側を流れる。戦国時代、棚倉町以南から常陸国の境までを「南郷」といった。この南郷地域を代表する城が赤館城である。その城跡を目指し、水戸から車で国道118号を北上した。太子町から久慈川を越えて福島県東白川郡矢祭町に入る。塙町を過ぎると、棚倉町に至る。

国道118号は、棚倉町中心部を迂回して通っている。それを迂回せずまっすぐ中心部に向かう。道は県道25号（棚倉鮫川線）である。中心部を過ぎると、正面に小高い山並みが見えてくる。県道はその山並みを二つに分けるように北へ伸びている。進行方向右側に宇迦神社が鎮座し、左側に赤館公園入口がある。公園を目指し、狭い一方通行の山道を登っていく。頂上が赤館城本丸跡である。

眼下に目をやると、棚倉の町が一望できる。今から460年も前、この赤館城の攻略を目指す佐竹氏と城を死守しようとする白河結城氏が戦った。なぜ、佐竹氏は関東平野が広がる南でなく、山また山が続く北へと進出したのか。そんな思いを抱かせる景観である。連載の第2回で「奥州にこだわった始祖・源義光」をテーマとした。戦国大名の歩みを始めた佐竹氏は、義光のDNAが乗り移ったかのように再び奥州へのこだわりを見せ始めた。

北進策をとった背景

佐竹氏がなぜ北進策をとったのか。『茨城県史＝中世編』に興味深い記述がある。「佐竹氏の強大さを支えてきた基礎はいろいろと考えられるが、その中でもっとも重要なものは広大な領地である。具体的にいえば、それは膨大な山地であり、またその中に含まれていたといわれる金などの鉱物資源であったと思われる」という。佐竹氏はその金を得るため奥州の山々を目指した、ということなのか。

『矢祭町史（第二巻）資料編』は序文で当時の民衆生活に触れながら次のように指摘している。「佐竹氏が南郷に対して、とくに重視したものに金山経営があり、この金山経営に南郷の人々が動員されていることが史料からうかがわれます」と。この産金のシンボリックな山が八溝山（標高1022m）であった。常陸（茨城県）、陸奥（福島県他）、下野（栃木県）の3国（3県）にまたがってそびえ立っている。

八溝山は平安時代から金を産出する山として知られていた。平安時代の歴史書『続日本後記』は、「承和三年（836）正月、陸奥国白河郡従五位下勲十等八溝黄金神」と記載する。遣唐使派遣のため八溝山に産金を求めたところ通常より多い金が採れ、朝廷に献上された。そこで朝廷は八溝黄金神に「従五位下」を授けた、という。既に八溝山は産金の山として遠く京都にも知られていた。

八溝山麓南側、依上保の奪還

『続日本後記』に「陸奥国白河郡」と記載された八溝山に八溝嶺神社が鎮座し、黄金神を祀っている。その八溝山山麓の南側に依上保がある。「保」とは行政区画の一単位のこと。今の太子町一帯を指すと見られている。『矢祭町』（第一巻通史・民俗編）は「佐竹氏が南郷で、まず目指したのは依上保の奪取である」と書く。佐竹氏は常陸国と接するこの依上保の奪還から北進策に着手した。

その時期は「佐竹百年の乱」を終息させた16代当主義舜の頃と考えられる。依上保は、当初、陸奥国白河の領主、白河結城氏が領有していた。白河結城氏は下総国の結城（茨城県結城市）を拠点とする結城氏の分家である。陸奥国に位置する依上保も支配下に置いていた。この依上保は、一時、「佐竹百年の乱」を起こした山入氏が領有した時期があった。

しかし、山入氏は滅亡した。義舜はすかさず、山入氏旧領の依上保の奪取に動いた。太子町袋田にあった月居城を拠点に依上保に進出。太子城を

はじめ白河結城氏配下の城を次々に攻め、依上保を手中に収めた。義舜亡き後の17代当主義篤も父の遺志を継ぎ、石井氏ら地元武将に「知行充行状」を発給し、堅固な支配態勢を築いていった。

南郷の城を次々と攻略

次の標的は南郷だった。南郷も常陸国と接する。その最南端は矢祭町である。矢祭町は佐竹氏の本城があった常陸太田市から国道349号を北上すれば、久慈川を渡らず行ける。同市徳田町の「明神峠」は福島県との県境に位置する。付近には「大垣関」があったとされる。そこを越えれば南郷である。依上保側から南郷へ入るには久慈川を越えなければならない。明神峠越えなら一直線である。

最初の攻略地は、白河結城氏が支配していた矢祭町の東館だった。依上保を支配下においた義篤はじりじりと東館に迫り、ついに東館の破却を白河結城氏に約束させた。天文10年(1541)10月頃とみられる。義篤はそれから4年後の天文14年(1545)に亡くなった。後を継いだ18代当主義昭はさらなる北進を目指した。次の目標は隣の塙町の羽黒山館だった。

天文23年(1554)と同24年、義昭は家臣の迎氏や外様の有力武将である船尾氏に塙町内の土地を与える充行状を出している。これは、羽黒山館の城館が佐竹氏の手落ちたことを踏まえての措置と考えられる。義昭はこの羽黒山館の城を前線基地として次に棚倉町寺山の寺山城(館)攻略に入った。『佐竹家譜』義昭の項に「永禄4年(1561)7月、寺山出陣」とある。

数度の戦いで赤館を攻略

佐竹軍は電光石火の如くに寺山城を攻め落したようだ。『佐竹家譜』の佐竹義昭の項に次のような記述がある。永禄4年(1561)10月、家臣の「糸井能登守に授ける書に曰く」として寺山城の「在陣」の労をねぎらい、赤館落城の折には相当の土地を与える、と書いているのである。義昭は同年7月に陣出し、3か月後の10月に寺山在城の家臣にこうした文書を出している。寺山城が落城していなければ出せない文書である。

寺山城を攻略した翌年の永禄5年(1562)、義昭は32歳という若さで隠居し、家督を嫡男義重に託した。19代当主義重は「鬼義重」や「坂

東太郎」の異名をもつ勇猛果敢な戦国武将である。義重は白河結城氏の南郷支配の拠点、赤館城攻略に取りかかった。1回目の赤館出陣は元亀3年(1572)。この時は和睦となった。天正2年(1574)に再び赤館城を攻撃したが、白河結城氏も必死に防戦し、城を落せなかった。

赤館攻防中、佐竹側についた在地領主がいた。鮫川村の赤坂城主、赤坂氏である。『棚倉町史』(第一巻通史編)は「はじめ白河結城氏についていたが、永禄年中(1558—70)には佐竹氏と気脈を通じ、佐竹勢の南奥進出を嚮導した」と述べている。嚮導とは先導役の意味である。『鮫川村史』(第1巻通史・民俗編)に「赤坂氏は佐竹氏と佐竹氏優位の同盟を結び、その麾下となったとみられる」とみている。

義重は天正3年(1575)6月、再び大軍を率いて赤館城を攻めた。3度目にして赤館城を攻略、占拠に成功した。赤館を抑えれば白河結城氏の本拠地・白河は目と鼻の先である。佐竹氏は、赤館を抑えたことで八溝山の北側地域を支配。依上保と合わせ八溝山麓の南・北側、それに東側を自領とした。本拠地・太田に直結する久慈川の水運も手中にした。佐竹氏は白河結城氏の肩越しに見える南奥の雄、伊達氏と向き合う位置にきたのである。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



佐竹氏が攻略に成功した赤館城跡は、現在、「赤館公園」として利用者の憩いの場となっている＝福島県東白川郡棚倉町赤館